

鈴木 華子氏の学位論文審査の要旨

論文題目

Risk and protective factors for psychopathology in youth: The roles of parent-child relationships and childhood experiences

(親子関係と小児期体験が青少年の精神病理に及ぼす影響の検討)

小児期の経験と親子関係が、子どもの発達やメンタルヘルスに及ぼす影響を明らかにするために実施された3つの研究で構成される。研究1は一般家庭における親の養育態度に着目し、研究2では一般家庭における親からの過度な体罰に着目し、研究3では、児童養護施設入所以前の家庭環境における逆境体験に着目することにより、より体系的に小児期経験と発達の関係性を明らかにすることを目指している。

研究1では、大学生を対象(n=4,357)として Parental bonding instrument の確認的因子分析を行い、次に女子大生を対象(n=261)として被養育体験と現在の抑うつ症状の関連を検討した。確認的因子分析の結果、4因子構造(Care, Indifference, Over-protection, Autonomy)が最も高い適合度を得た。また被養育体験と抑うつ症状を検討した結果、父親の養育が適切であるほど、女子学生の抑うつ症状が低いことが明らかとなった。さらに父親の適切な養育は、ストレスと認知のゆがみを低くし、自己効力感を高くすることにより、抑うつ症状を抑えることが判明した。研究2では、青年を対象として、過度な体罰を受けた群(n=23)とコントロール群(n=22)との脳画像(MRI)を比較した。コントロール群に比べて、被体罰群では、右内側前頭回が19.1%、左内側前頭回が14.5%、右前帯状回が16.9%減少していた。研究3では、児童養護施設に入所する児童を対象(n=342)に、入所前の逆境体験がどのように現在の抑うつ症状を予測するのかを検討した。虐待とネグレクトなどのマルトリートメントは、愛着と自尊感情を介して抑うつ症状を予測することが分かった。また親の精神疾患や拘禁などの体験は抑うつ症状を予測しないことが明らかになった。

審査では、結果モデルの説明力について、人種差に関する解釈と得られた器質的な変化の機序と可逆性について、実験的な裏付けデータの有無、先行研究との比較検討等の様々な質疑応答がなされ、申請者はおおむね適切に回答した。これらの研究結果から、親子に直接働きかける予防と介入、そして社会的価値観に働きかける予防と介入という2方向のアプローチが、子どもの発達に最適な環境作りに有効なことが証明され、学位の授与に値すると評価した。

審査委員長 公衆衛生・医療科学担当教授

加藤 貴彦

審査結果

学位申請者： 鈴木 華子

専攻分野： 臨床行動科学

学位論文名： Risk and protective factors for psychopathology in youth: The roles of parent-child relationships and childhood experiences
(親子関係と小児期体験が青少年の精神病理に及ぼす影響の検討)

指導： 北村 俊則 前教授
友田 明美 前准教授

紹介： 西谷 陽子 教授

判定結果：

可 不可

不可の場合： 本学位論文での再審査

可 不可

平成 24 年 2 月 3 日

審査委員長 公衆衛生・医療科学担当教授

審査委員 生命倫理学担当教授

審査委員 地域看護学担当教授

加藤貴彦
浅井篤
上田公叶